

シンポジウム

## 理想と現実のはざままで生徒を育む

Nurturing students between ideals and reality

草島 進之介

Shinnosuke Kusajima

9年前に、堺市の中学校に赴任した。学校の先生になるのが自分の夢であったので、楽しみにして4月1日に中学校へ行った。しかし、校長室で最初に、「草島君、この学校は大変な学校やで」と伝えられた。実際、毎日のようにとんでもない出来事が起こり、どう対応していいか分からない日々が続いた。そんな中、4年目から生徒指導主事になり、やんちゃな生徒との関わり、事件やトラブルの対応、保護者対応、警察や関係諸機関との連携などを行い、少しずつ手ごたえややりがいを見出してきた。

今日はシンポジウムのテーマについて、中学校の保健体育科の教員として大いなる理想を語ってほしいと請われた。そこで、赴任先の現状ではなく、私の考える理想論を中心に話したい。

地の状況は依然かなり厳しい。私も昨年母校を訪れたが、私が日々練習していた体育館は原型を留めていなかった。そういう事実を目の当たりにして、単に悲観的になるよりも、自分の得意分野の立場から、できること、やらなければならないことを考えなければならないと私は考えた。今日は中学校の保健体育科という立場で、どういことができるかという観点で話をしたい。

大きな地震や津波など、日常生活ではとても想像できないような状況で、それでも自分のいのちを守るためには、例えば、でこぼこした道ができるだけ長く走ったり、できるだけ速く走る、あるいは高いところから飛び降りたり、逆によじ登る力、できるだけ水面に浮き続ける力、あるいは家族をずっと抱いたまま移動する力が必要となる(図1)。私たちの人生には、そう

### 東日本大震災から考える

平成23年3月11日14時46分18秒、宮城県牡鹿半島の東南東沖130kmの海底を震源とする東北地方太平洋沖地震が発生。地震の規模はマグニチュード9.0で、日本周辺における観測史上最大の地震である。



このように、絶対に逃げなければいのちが危ない状況で、より速く、また長く走る。高い場所によじのぼる、水面に浮き続ける、家族を抱いたまま移動する…。

図1

2年前の3月11日、堺市の中学校では卒業式が行われていた。それから2年経っても、被災

### 問題提起

**「いのちを守る・力強く生き抜く」  
このような運動能力はどこで培うのか？**

身体を動かす能力で、生涯にわたって必要とされ、誰もが等しくその能力の維持・向上に関する方法を習得すべきである。



**義務教育段階  
体育に責務あり**



図2

堺市立鳳中学校

いう「いのちを守り、力強く生き抜くための力」が発揮されないと、いきなり危険な状況にさらされたときに、とっさの対応ができないということが少なからず存在している。

今の私の場合、危険な状況にさらされたときは、持って生まれた自分の運動能力や運動経験、年齢と知恵というものを使って対応をするが、それに加えて、「いのちを守り、力強く生き抜くための力」が育まれていれば、そのときにできることは当然増える。そういう力が育まれていればと考えるのは私だけではないと思う。

では、こうした力はいったいどこで培い、育んでいけばよいのか（図2）。私は、「いのちを守り、力強く生き抜くための力」は、生涯に渡って必要であり、誰もが等しくその能力の維持・向上に関する方法を習得すべきであると考ええる。この観点でいえば、義務教育の体育にその責務があるのではないかと考える。体育の時間に50mをきれいなフォームで速く走る、あるいはクロールや平泳ぎできれいに泳ぐことは重要である。しかし、整地されていない無茶苦茶な道をとにかく走る、あるいは形の整わない重いものを持って移動するなど、競技やスポーツ、からだづくりとは異なるカテゴリーの運動能力を高めることを体育の時間に経験させることができれば、あるいは、将来そういう力が必要なときがあるかも知れないことを義務教育段階で理解させることができれば、「いのちを守り、力強く生き抜くための力」が向上し、授業後だけでなく、中・長期的に見て、危険な状況によ

## 教科「体育」の目標

|  |
|--|
| <p><b>●小学校体育科の究極的な目標・・・</b><br/> <b>「楽しく明るい生活を営む態度を育てる」こと</b><br/>                 心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。</p> <p><b>○中学校保健体育科の究極的な目標・・・</b><br/> <b>「明るく豊かな生活を営む態度を育てる」こと</b><br/>                 心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。</p> <p style="text-align: right;"><small>学習指導要領解説より</small></p> <p><b>「いのちを守る・力強く生き抜く」という能力を育むというねらいは現在定められていないので、実施されていない。</b></p> |
|--|

図3

り適切に対応できるのではないかと考える。

ただ、小・中学校における体育の目標に「いのちを守り、力強く生き抜く力」というのは明記されていない（図3）。着衣泳を実施しているところはあるが、先ほど述べたような観点で、体育の年間計画に「いのちを守り、力強く生き抜くための力」という目標を組み入れて実施している学校はほとんどないと思う。

では、学校現場ではどのような授業が展開されているかということ、私の知っている範囲だけの話ではあるが、どの単元も「学習の目標」「学習の内容」「学習の評価」の乖離が甚だしく、それが生徒の正しい授業理解を妨げているという課題がある（図4）。

## 現場の現状


| 学習の目標                                  | 学習の内容  | 学習の評価                 |
|--|--|-----------------------|
| 本来なら3つともリンクすべきであるが、乖離が甚だしい現状と言わざるをえない！ |  |                       |
| 高邁で多面的口頭で様々な理想を語る                      | 各スポーツ競技の専門的な技術・戦術指導  | 数値化しやすい安易で合理的な実技テスト中心 |
| 二極化の原因<br>学習意欲低下                       |  |                       |

図4

たとえば、授業中口頭では学習指導要領に掲げている高邁な理想や、生徒に行ってもらいたい陶冶目標を謳い、その達成に向けて努力するように訴えている。

しかし、実際に授業で指導する内容は、各単元のスポーツ種目の専門的な技術や戦術が主となってしまっている。特にその単元のスポーツ種目を専門にしていた先生の場合は、その傾向がさらに強くなる。逆に、自分の不得意な単元になると、短時間技術指導をしてすぐゲームという形の、レクリエーション的授業が展開されてしまう。さらに、授業の評価となると、タイムの計測やシュート本数を数えるといった、極めて安易で合理的な、数値にしやすいような方法でしか行わない。

そのため、授業で行ってきた内容が正しく評価されているのか、あるいは部活や習い事でやっていたから成績がよいのかということが、生徒の中で判断できない。同時に、先生の方も生徒の頑張りが適正に評価できていないという状態が、一単元、もしかしたら3年間続いてしまうという現実がある。ここまで「目標・内容・評価」が乖離してしまうと、まじめな生徒ほど授業中何を目標とし、どう頑張ればいいのか分らなくなってしまう。このことが、学習意欲の二極化、つまり好きな子は好き、嫌いな子は絶対にしないという状況を生んでしまっているのではないかと私は考える。

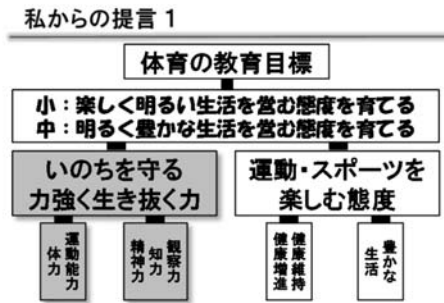


図 5

今話したような現状に加えて、現場はただでさえ厳しい状況（激務）にある。そういう現場で現在働いているがゆえに実践が難しいことは充分承知しているが、ここからはあえて、理想論を提言したい。

まず、学習指導要領に掲げている義務教育における体育の目標はそのままよいが、これと同列に「いのちを守り、力強く生き抜く力」を明記して、実際に授業をする必要があると私は考える（図5）。冒頭にも話したが、この「いのちを守り、力強く生き抜くための力」が必要ないという人などいない。そして、からだを動かす能力で、生涯に渡って必要とされ、誰もが等しくその能力の維持・向上に関する方法を習得すべきということ言えば、義務教育の体育にはこれを実践する必然性があると考え。もう少し大げさに言うと、この部分（いのちを守

り、力強く生き抜く力）が体育の内在的価値とか、体育の独自性と訴えかけてもいいのではないかと思う。そういう授業のねらいを生徒に伝えることができれば、生徒も体育の授業において「いのちを守り、力強く生き抜くための力」を身につけなければならないし、この力は生きていく上で必要だと理解・納得して、体育の授業を頑張ろうという気持ちも増すだろう。そして、10代、20代、50代になっても、義務教育で学んだように体を動かさなければならないと考えるような「自立した運動者」が、今やっている学校教育の体育の授業の成果よりも増えるのではないかと思う。

私からの提言 2

受験のための評価は体育になじまない？

- ・評価“1”なのに運動能力の高い生徒
- ・評価“10”なのに体育が嫌いな生徒
- ・“5”と“6”の差に「目標に準拠した説明」ができるか
- ・受験に必要な成績をつけるためだけの実技テスト

体育の独自性・内在的価値に基づく授業

- ・体育が義務教育で本当に教えなければならないこと
- ・先生が先生として本当に教えたいこと
- ・生徒が本当に得る必要になることを教える

図 6

さらに、現行の体育の評価方法について疑問を投げかけたい。中学校では受験のために全教科で10段階評価をしている。しかし、そもそも体育の運動能力に10段階評価が馴染んでいるのかという疑問がある（図6）。なぜなら、体育の教育目標が「楽しく明るい生活を営む態度」や「明るく豊かな生活を営む態度」ということであるならば、運動する能力の細かい点数化は似合わないのではないかと考えるからである。現場では10段階評価を必ずしなければならないので、そのこと自体が体育の授業の本質・目的ではないとわかっていながらも、本来の目的からかけ離れた学習やテストは必ず実施している。

小学校では「よくできる」「できる」「がんばろう」という3段階の評価をするが、この評価は単にその子の能力を評価しているだけではな

くて、その子はその評価を今後自分の中で生かせるような評価、つまり、できていないところがあれば次に頑張ろうと考えられるような評価として伝えられれば、その評価の意味や教えている内容の独自性・内在的価値がもっと伝わるのではないかと考える。

正直、中学校の教育現場は大変である。毎日色々大変な問題が生まれている。しかし、目の前の生徒たちは一所懸命頑張っていて、からだを動かしているのだから、私自身も理想に向かって日々取り組んでいければと思う。



プロフィール

草島進之介  
(くさじま・しんのすけ)

学歴等：筑波大学体育専門学群卒業，筑波大学大学院体育研究科修了

略歴等：大学院修了後，保健体育科の教諭として堺市立鳳中学校に着任。4年前から生徒指導主事，7年前から首席として学校教育に携わる。また，日本体育学会で教材研究に関する発表（2009年：バレーボール，2011年：バスケットボール，2012年：陸上リレー）を行う。